

ポジティブ・ネガティブに関する感情価および 個人内要因が再生成績に及ぼす影響

大和田智文*・永田健太郎**

要 約

従来感情記憶に関する研究では、ポジティブ、ネガティブといった感情を伴う刺激に対する記憶(すなわち、感情記憶)は、感情を伴わない記憶よりも優れているという一貫した結果が示されている。しかしながら、感情記憶の中でもポジティブな記憶とネガティブな記憶のような、感情記憶同士の記憶差に焦点を当てた研究においては一貫した結果が得られていなかった。そこで本研究では、このような対立する感情記憶間の再生成績に差が生じるのかを検討することを目的とし、調査を行なった。その際、江戸川大学人間心理学科の学生32名(男性7名、女性23名、回答しない2名)を対象にGoogleFormを用いた調査を実施した。本調査では、独自に作成した架空のエピソードを刺激文(シナリオ)として用いた感情価(ポジティブ vs. ネガティブ)による再生成績の差の検討に加え、個人内要因(内向性および特性不安)が再生成績に及ぼす影響を検討した。その結果、特性不安が高いほど再生成績が有意に高い傾向にあることが示された。また、ネガティブ条件において、再生成績が有意に高い傾向にある項目がみられた。これには、たとえば不安患者にみられるような注意バイアスと類似の現象が関連していたのではないかと考えられた。すなわち、感情価にかかわらず、シナリオ自体に注意バイアスが向けられた結果と解釈することができる。このため、使用するシナリオや再生課題について再考の上、対立する感情記憶間の再生成績の差についてさらに検討を加えていくことが必要となる。

キーワード：記憶、感情価、再生成績、内向性、特性不安

問 題

感情記憶

人は無意識のうちにさまざまなことを記憶しており、それらには感情が付与されていることがある。たとえばサッカーの試合で自分が逆転ゴールを決めたという記憶には、嬉しいというポジティブな感情が付与されている。また、恋人に振られたという記憶には、悲しみなどのネガティブな感情が付与されている。これらの嬉しい、悲しい、怖いなどの感情を伴った出来事の記憶は、そうでない記憶と比較するとよく覚えている(数井他、

2018)。また、小林・松川(2011)は、感情を伴った記憶の再生成績についてさまざまな刺激を用いて比較検討し、ニュートラル刺激よりも、ポジティブ、ネガティブといった感情を伴う刺激に対する記憶(すなわち、感情記憶)の再生成績が高いことが研究間で一致していることを紹介している。

上記のように、感情記憶が、感情などを付与されていない単純記憶と比べ、記憶に残りやすいとされている一方で、感情記憶の中でもポジティブな記憶とネガティブな記憶のような、感情記憶同士の記憶差に焦点を当てた研究においては一貫した結果が得られていない。たとえば堤・清水(2020)では、ネガティブな記憶は想起されやすいという結果(Kensinger & Schacter, 2006)が示されている一方で、ネガティブな出来事の記憶の詳細はポジティブな出来事の記憶よりも忘却され

2025年11月30日受付

* 江戸川大学 社会学部人間心理学科教授 社会心理学、
青年心理学

** 江戸川大学 社会学部人間心理学科 2023年度卒業生

やすいという結果 (Walker et al., 2003) も紹介しており、ここでは各研究の結果は対立している。

感情記憶研究の対立

このように、なぜ各研究の結果が対立するのだろうか。その理由の1つとして、ポジティブおよびネガティブの各感情が1次元上の両極にある関係ではなく、また各感情も1次元構造ではなく2次元構造であるからだと考えられている。たとえば、山崎 (2006) は一般にポジティブな感情とネガティブな感情は負の関係にあるが、その相関はかなり低く、PANASの標準化論文 (Watson et al., 1998) においては、-.12 から -.23 という低い負の相関が得られており、無相関という報告もみられることを紹介している。

また、実験の手法にも問題点があるとされている。たとえば、野畑・越智 (2005) は、実験結果が一貫しない理由としてもっとも大きな問題点は、記銘する対象に自伝記憶 (日常生活の中で経験した個人的に意味のある出来事に関する記憶) を用いていることにあるとしている。その問題点として、自伝記憶は感情を伴うことが多いが、その質や覚醒度はさまざまであり、体験した時点と想起する時点では変化している可能性があることに加え、事後的に体験時の感情を適切に反映できていない保証はないといった点を指摘している。

以上より、感情記憶同士の記憶差を検討するために、自伝記憶を用いるのには限界があるとしている。

適切な測定方法

では感情記憶の測定には、どのような手法がもっとも適していると考えられるだろうか。野畑・越智 (2005) は、神谷 (1998) によって行われた会話エピソードを用いた方法が有効であると紹介している。紹介されている実験内容は、実験参加者に会話エピソードを呈示し、どのような感情が生じたかを評定させた後、1時間後に内容についての再生テストを行うものである。実験の結果、感情喚起が低い場合では、快条件と不快条件では差がみられなかったが、感情喚起が高い場合

では、快条件が不快条件よりも再生成績がよいことが示されている。

また、神谷 (1997) は、これまでの研究で使用された刺激の違いに着目して従来の研究結果を再検討している。単語による研究では、快感情を引き起こす刺激と不快感情を引き起こす刺激の保持成績がほぼ同等であったのに対し、愛や平和といった快単語や、戦争や殺人といった不快単語などの感情的特性を持つ単語を処理しても、感情が強く想起されないという問題点を指摘している。一方で、日常生活における個人的エピソードを刺激として用いた研究では、日常の個人的エピソードには感情が付随していることが多いため、感情の影響を検出しやすいとしており、快な出来事に関する記憶が不快な出来事に関する記憶よりも優れている傾向を見出した結果を報告している。また、同様の知見は、Banaji & Hardin (1994) によっても指摘されており、感情記憶の測定にはエピソードを用いた測定がもっとも適切であると考えられる。

以上より、感情記憶ごとに再生成績に差があることは明らかであるため、一貫した結果が得られていない感情記憶の再生成績について追検討することは意義があるものと考えられる。そこで本研究では、独自に作成した架空のエピソードを刺激文 (シナリオ) として用いて各感情記憶の再生成績の差を検討する。

特性不安とネガティブ感情

上記に加えて、本研究では特性不安を測定し、再生成績との関連性を検討する。不安の強い者 (高特性不安者) や抑うつ者は中性情報よりも脅威情報 (ネガティブ感情を喚起する情報) を選択的に処理することが指摘されている (藤原他, 2007) ため、本研究でも同様の傾向がみられることが考えられる。すなわち、特性不安が高いほどネガティブ感情を喚起する情報についての再生成績が高いことが予測される。

内向性とネガティブ感情

さらに、本研究では内向性を測定し、再生成績

との関連性を検討する。川原・松岡(2008)は、辻(1998)が内向的な人は外交的な人よりも、ネガティブ体験に注意がひきつけられる傾向にあると指摘していることを紹介しており、本研究でも同様の傾向がみられることが考えられる。すなわち、内向性が高いほどネガティブ感情を喚起する情報についての再生成績が高いことが予測される。

本研究の目的

以上を踏まえ、本研究では特性不安、内向性および感情価(すなわち、架空のエピソードとして作成されるシナリオにおける、ポジティブ感情 vs. ネガティブ感情)が再生成績に及ぼす影響を検討することを目的とする。この検討は、感情記憶ごとに再生成績に差があることは明らかであるが、一貫した結果が得られず対立している各感情記憶の優劣について判断する1つの材料になりうる点において意義があるものと考えられる。

方法

調査対象者および手続き

調査対象者(参加者)は、江戸川大学社会学部人間心理学科の学生32名(男性7名、女性23名、回答しない2名、平均年齢20.0歳、標準偏差1.24)であった。これらの参加者のうち、誕生月が奇数月の参加者には、ポジティブ感情を喚起させることを意図した情報が記載された架空のシナリオ(以下「ポジティブ感情」と記載)の呈示後に記憶の再生課題(以下「ポジティブ課題」と記載)に、誕生月が偶数月の参加者には、ネガティブ感情を喚起させることを意図した情報が記載された架空のシナリオ(以下「ネガティブ感情」と記載)の呈示後に記憶の再生課題(以下「ネガティブ課題」と記載)に回答してもらうために、参加者募集用GoogleClassroom上に2つのGoogleFormのURLを記載し誘導を行い、どちらか一方の質問フォームに回答を求めた。GoogleFormには、PCまたはスマートフォンからアクセスするよう求めた。

また、ポジティブ課題、ネガティブ課題ともに、2つの質問フォームが用意された。最初の質

問フォーム(以下「第1フォーム」と記載)は、人口統計学的変数、Big Five尺度より内向性を測定する下位尺度、STAI日本語版特性不安尺度、ポジティブもしくはネガティブ感情(参加者間配置)、シナリオ読了チェック項目、2番目の質問フォーム(以下「第2フォーム」と記載)との回答の照合のために用いる識別番号の作成およびその入力項目より構成された。

第1フォームの回答を送信すると、続いて第2フォームに回答するためのURLが呈示され、次の質問に進むよう促された。

第2フォームは、第1フォームで作成および入力された識別番号の再入力項目、記憶の干渉課題として漢字の意味課題および計算課題、および記憶の再生課題より構成された。

第2フォームの回答を送信する前に、本調査が、第1フォームで呈示されたポジティブもしくはネガティブ感情が、第2フォームで呈示された記憶の再生課題の成績にどのような影響を及ぼすかを検討するために実施されたことが説明され、これに改めて同意する場合は送信ボタンを押すよう促された。同意できない場合は回答を中止するよう促し、あわせて研究実施者(第二著書)と研究責任者(第一著者)の連絡先が再呈示された。回答を中止した場合は、送信済みの第1フォームも破棄することが呈示された。

なお、本調査では、記憶の再生課題から、記憶材料であるポジティブもしくはネガティブ感情に後戻りして回答することを防ぐために、第1フォームと第2フォームに分けて回答を求めた。具体的な質問構成については以下に記載する。

質問構成(第1フォーム)

人口統計学的変数 人口統計学的変数として性別、学年、年齢について回答を求めた。

内向性 内向性を測定するために、Big Five尺度(和田, 1996)より内向性を測定する下位尺度を用いた。本下位尺度は本来「外向性」であるが、本研究の目的にあわせ「外向性」に相当する項目を逆転項目として扱った。項目は「無口な」、「暗い」などからなる計12項目で、7段階評定(「1=

全く当てはまらない」から「7=非常に当てはまる」)で回答を求めた。

特性不安 特性不安を測定するために、STAI 日本語版特性不安尺度(清水・今栄, 1981)を用いた。項目は「疲れやすい」、「泣き出したくなる」などからなる計 20 項目(1次元の尺度)で、4 段階評定(「1=全くそうでない」から「4=全くそうである」)で回答を求めた。

感情価(ポジティブ感情、およびネガティブ感情)

ポジティブもしくはネガティブ感情を喚起させるために、「ある日の出来事」に関するシナリオを独自に作成し呈示した。「以下のシナリオはある日の出来事について書かれたものです(内容や登場人物名は架空のものです)。よく読んでから次の質問に進んでください。」と教示した後シナリオを呈示した。呈示されたシナリオ(ポジティブもしくはネガティブ感情。参加者間配置)を Table 1 および Table 2 に示した。

Table 1 呈示されたポジティブシナリオ

ポジティブシナリオ

朝 8 時。トーマスは雲一つない快晴の下を陽気な足取りでオフィスに向かっていった。入社して 9 年目にして、目標であったプロジェクトリーダーに任命され、そのプロジェクトが昨日とてもいい結果で完遂したのだ。上司のジェームズからプロジェクトリーダーに推薦され、最初こそ不安とプレッシャーがあったが、今までの下積みと勉強が活き、自分でも驚くほどプロジェクトはうまく進んだ。時にはプロジェクトに自分の専門外の知識であったり、部下の教育で悩むこともあったが、優秀な同僚のニックと部下の支えで乗り越え、プロジェクトチームの仲は一層深まっていった。プロジェクト終盤には、現在の直属の上司であるサラがプロジェクトの経過や完成度の視察に来たが、とても好評でその後もプロジェクトは問題なく進み、昨日ついに完遂し今日の勤務後に打ち上げがあるのだ。オフィスに到着すると、同僚であるソフィアは駆け寄ってきて労いの言葉をかけてくれた。また部下のケイトも席に着くなりプロジェクト完遂を祝ってくれた。トーマスは今までの努力が報われ、周りにも自分の頑張りが認められたことを非常にうれしく思った。また上司からの「もっと早く任せればよかった。」という言葉で気分が高揚し、いつも以上に仕事が捗った。昼休みにいろいろな人から声をかけられ、上司にご褒美でいつもよりも豪華なランチに連れて行ってもらい、午後には次のプロジェクトについての会議を行い、そこでまた是非リーダーに推薦され、仕事のモチベーションがとても上がっていた。午後の仕事を終え、打ち上げを行う店に向かっていった。空を見上げると、夏の陽射しに包まれるような晴天が広がり、心地よい風に吹かれながら自分の未来に希望を感じていた。

Table 2 呈示されたネガティブシナリオ

ネガティブシナリオ

朝 8 時。トーマスは曇り空の中、憂鬱な足取りでオフィスに向かっていった。入社して 9 年、やっとリーダーに任命されたプロジェクトを解任されてしまったのだ。上司のジェームズからプロジェクトリーダーに推薦され、最初こそ順調にプロジェクトを進めていたが、彼の元から離れていくものが現れはじめ、プロジェクトに遅れが出始めた。彼に自覚はなかったが初めてリーダーを任せられた焦りや、絶対に成功させなければならないプレッシャーから、部下に無意識でパワハラを行ってしまっていたのだ。しかしプロジェクト中盤には同僚のニックに指摘され、部下にも謝罪し何とかプロジェクトを持ち直すことができた。だが一度失った信頼を完全には取り戻すことはできず、プロジェクトがうまく進まない焦りや苛立ちから、またパワハラを繰り返してしまい、結果的に現在の直属の上司であるサラからプロジェクトリーダーの解任が告げられた。オフィスに到着すると、仲のいい同僚のソフィアとすれ違ったが無視をされ、部下のケイトとは挨拶したがどこかよそよそしい雰囲気であった。すでに同僚たちには自分の失態が広まっていたのだ。トーマスは孤独感に襲われ、心がさらに重くなっていった。上司からの「まだ任せるには早かった。」という言葉が頭から離れず、自分の価値を疑ってしまった。聞こえてくる声すべてが自分を非難する声に聞こえ、全く仕事が手につかずほとんど何もせずに午前中を終えてしまった。気持ちを切り替えて、昼休みには何か食べなければと食堂に向かうが、周りからは笑い声や楽しそうな会話が聞こえ、彼は余計に憂鬱な気分になり、頼んだ定食もほとんど残し、残りの昼休みをトイレの個室で過ごした。その間も彼は自分自身を責め続け、自己嫌悪に陥っていた。午後になっても結局仕事が手につかず、定時で帰宅することにした。帰宅途中に夏の陽気も感じられないくらいの大雨が降り、冷たい雨に打たれながら、自分の未来に不安を感じ、前進する勇気を失ってしまった。

シナリオ読了チェック項目 シナリオを読み終えたら、「読み終わりました」にチェックを記載するように求めた。

識別番号の作成および入力 第1フォームと第2フォームに対する回答を照合するため、アルファベットを1文字以上含む半角7文字以上の識別番号を作成、入力するように求めた。この識別番号は第2フォームでも使用するため、忘れないように求めた。

質問構成 (第2フォーム)

識別番号の再入力 第1フォームと第2フォームに対する回答を照合するため、第1フォームで作成、入力させた識別番号を再入力させた。

干渉課題 Crawford et al. (2002) などに倣い、ポジティブもしくはネガティブ感情に関する情報の記憶の干渉のために、呈示された漢字の反対語を選択する計4問からなる意味課題 (Table 3)、および計5問からなる計算課題 (Table 4) を独自に作成し呈示した。

Table 3 意味課題

意味課題
明
1. 暗 2. 悲 3. 閉 4. 冷
大
1. 細 2. 短 3. 狭 4. 小
喜
1. 悲 2. 哀 3. 恐 4. 怒
弱
1. 優 2. 猛 3. 勇 4. 強

注) 教示文は、「以下に示す漢字と反対の意味を持つ漢字を選択してください」。

Table 5 記憶の再生課題 (ポジティブ課題)

ポジティブ課題
1. 一番最初に出てくる登場人物の名前を答えて下さい。
2. 1の人物をプロジェクトのリーダーとして推薦してくれた上司の名前を答えてください。
3. プロジェクト終盤でプロジェクトの視察に来た上司の名前を答えてください。
4. 1を支えた優秀な同僚の名前を答えてください。
5. 1に駆け寄り労いの言葉をかけた同僚の名前を答えてください。
6. プロジェクト完遂を祝ってくれた部下の名前を答えてください。
7. 1がオフィスに向かっているときの時刻を半角で数字のみ答えてください。
8. 1の人物は入社してから何年目にプロジェクトリーダーに任命されましたか。半角で数字のみ答えてください。
9. このシナリオの季節を漢字で答えてください。
10. 上司から言われて1の気分が高揚したときの言葉を答えてください。

Table 4 計算課題

計算課題
354+267
482+753
721+438
589+426
673+518

注) 教示文は、「以下に示す式を計算し、その答えを回答してください (電卓を使用して構いません)」。

記憶の再生課題 各感情価 (ポジティブもしくはネガティブ) での再生成績を検討するために、「以下の質問について、先ほどのシナリオを思い出しながらお答えください。」と教示した後、各シナリオに関する質問への回答を求めた。再生課題は計10問用意された。ポジティブおよびネガティブ課題で呈示された質問を Table 5 および Table 6 に示した。

偶発再生の使用

本研究では再生課題に偶発再生を用いることとした。日常で生じるさまざまな出来事に対する感情、およびそれに伴う再生 (想起) は偶発的であることが多いと考えられたため、生態学的妥当性の点からも偶発再生を用いることが適切であると判断した。

Table 6 記憶の再生課題（ネガティブ課題）

ネガティブ課題

1. 一番最初に出てくる登場人物の名前を答えて下さい。
2. 1の人物をプロジェクトのリーダーとして推薦してくれた上司の名前を答えてください。
3. プロジェクトの解任を告げた上司の名前を答えてください。
4. プロジェクト中盤で1に指摘をした同僚の名前を答えてください。
5. 1を無視した同僚の名前を答えてください。
6. 1と挨拶をした部下の名前を答えてください
7. 1がオフィスに向かっているときの時刻を半角で数字のみ答えてください。
8. 1の人物は入社してから何年目にプロジェクトリーダーに任命されましたか。半角で数字のみ答えてください。
9. このシナリオの季節を漢字で答えてください。
10. 1の頭から離れない、上司から言われた言葉を答えてください。

調査時期

本調査は2023年7月上旬から下旬にかけて行われた。

倫理的配慮

Google フォームでの回答前に、フォームの冒頭の説明文により、フォームの構成内容、調査に要する時間、回答に正解や不正解はないこと、無記名式で回答は統計的に処理され個人が特定されることはないこと、回答は本来の研究目的のみに使用すること、回答は研究終了後厳重に保管され、保管期間終了後、適切に廃棄されること、回答は任意であり評価や成績には一切関係ないこと、途中で回答を中止しても問題のないことが示され、これに同意する者のみが調査に回答した。また、前述のとおり調査終了時に本調査のデブリーフィングを行い、ここで改めて同意を確認した上で回答の送信を求めた。なお、本研究は江戸川大学社会学部人間心理学科「人を対象とする研究」倫理審査小委員会の審査承認後に実施された（承認番号：A2023-078）。

結果

分析対象者

ポジティブ課題の回答者は20名（男性3名、女性15名、回答しない2名、平均年齢20.00歳、

標準偏差1.38）、ネガティブ課題の回答者は12名（男性4名、女性8名、平均年齢20.00歳、標準偏差1.04）であった。

なお、第1フォームと第2フォームの回答の照合が不可能な参加者（第2フォームでの識別番号の誤入力者）は存在しなかった。

記述統計量

各変数の記述統計量を求め Table 7 に示した。再生課題の成績については、ポジティブ課題、ネガティブ課題ともに1問1点で計算し、計10点満点とした。

Table 7 各変数の記述統計量

	項目数	平均値	標準偏差	α 係数
内向性	12	4.08	1.13	.908
特性不安	20	2.72	0.55	.911
ポジティブ再生成績 ($n = 20$)	10	2.55	2.48	
ネガティブ再生成績 ($n = 12$)	10	3.50	1.83	

感情価、内向性および特性不安が記憶の再生成績に及ぼす影響

感情価、内向性および特性不安が記憶の再生成績に及ぼす影響を検討するため、感情価（0= ポジティブ、1= ネガティブ）、内向性および特性不

安を説明変数、性別（0= 男性, 1= 女性）を統制変数、再生成績を目的変数とし、HAD18用いた強制投入法による重回帰分析を行った。性別を統制変数としたため、性別について回答のなかった2名は本分析からは除外した。その結果、再生成績に対し、特性不安の係数のみが有意傾向であった（ $\beta = .429, SE = 0.96, t(25) = 1.85, p < .10, 95\% CI [-0.200, 3.765]$ ）。ただし、モデルの決定係数は有意ではなかった（Adjust $R^2 = .029, F(4, 25) = 1.21, n.s.$ ）。よって、特性不安が高いほど再生成績が高い傾向にあるという結果が得られた。また感情価、内向性の効果は確認できなかった。

以上の重回帰分析の結果を Table 8 に示した。

Table 8 重回帰分析の結果

	係数	VIF	p 値
性別	-.185	1.084	.340
感情価	.310	1.287	.148
内向性	-.173	1.334	.420
特性不安	.429	1.602	.076 [†]

注) 係数は標準化回帰係数 (β) である。

[†] $p < .10$

項目ごとの正答数

項目ごとの正答数をポジティブ課題は Table 9、ネガティブ課題は Table 10 に示した。また項目ごとの正答数について、母比率不等の正確確率検定を実施した結果、1 番目の質問である「一番最

Table 9 ポジティブ課題の正答数

ポジティブ課題の正答数 (人)	
1. 一番最初に出てくる登場人物の名前を答えて下さい。	8/20
2. 1 の人物をプロジェクトのリーダーとして推薦してくれた上司の名前を答えてください。	5/20
3. プロジェクト終盤でプロジェクトの視察に来た上司の名前を答えてください。	5/20
4. 1 を支えた優秀な同僚の名前を答えてください。	3/20
5. 1 に駆け寄り労いの言葉をかけた同僚の名前を答えてください。	3/20
6. プロジェクト完遂を祝ってくれた部下の名前を答えてください。	2/20
7. 1 がオフィスに向かっているときの時刻を半角で数字のみ答えてください。	4/20
8. 1 の人物は入社してから何年目にプロジェクトリーダーに任命されましたか。半角で数字のみ答えてください。	11/20
9. このシナリオの季節を漢字で答えてください。	8/20
10. 上司から言われて 1 の気分が高揚したときの言葉を答えてください。	2/20

Table 10 ネガティブ課題の正答数

ネガティブ課題の正答数 (人)	
1. 一番最初に出てくる登場人物の名前を答えて下さい。	11/12
2. 1 の人物をプロジェクトのリーダーとして推薦してくれた上司の名前を答えてください。	5/12
3. プロジェクトの解任を告げた上司の名前を答えてください。	4/12
4. プロジェクト中盤で 1 に指摘をした同僚の名前を答えてください。	1/12
5. 1 を無視した同僚の名前を答えてください。	3/12
6. 1 と挨拶をした部下の名前を答えてください	2/12
7. 1 がオフィスに向かっているときの時刻を半角で数字のみ答えてください。	2/12
8. 1 の人物は入社してから何年目にプロジェクトリーダーに任命されましたか。半角で数字のみ答えてください。	6/12
9. このシナリオの季節を漢字で答えてください。	7/12
10. 1 の頭から離れない、上司から言われた言葉を答えてください。	1/12

初に出てくる登場人物の名前を教えてください」という問いで、ネガティブ課題はポジティブ課題よりも正答数が有意に多い傾向にあった ($p < .10$, $g = .20$)。

考 察

本研究では、シナリオの感情価および、内向性と特性不安が再生成績にどのような影響を及ぼすかを検討した。その際、内向性および特性不安が高いほど、ネガティブ感情を喚起させることを意図した情報についての再生成績が高いことが予測された。以下において、検討結果について考察する。

シナリオの感情価および内向性が再生成績に及ぼす影響

本研究では当初、シナリオの感情価で再生成績に違いが現れ、内向性が高いほどネガティブ感情の再生成績が高いことが予測されたが、再生成績に対する感情価の影響は確認できなかったため、当初の予測通りの結果は得られなかった。これは、再生課題の難易度が適切でなかった点に原因があったと考えられる。課題内容はだまかに人物名、時刻、年数、季節、セリフ内容の5つからなり、このうち人物名は海外の名前を使用した点、セリフ内容は正答例を複数用意したものの、記述式による回答はほぼ誤答であった点などから、再生課題の難易度が全般的に高かったと推測される。このため、再生課題の平均点がポジティブ、ネガティブともに4割以下という結果になったと考えられる。

特性不安が再生成績に及ぼす影響

本研究では当初、特性不安が高いほどネガティブ感情の再生成績が高いことが予測された。この点について、ネガティブ、ポジティブのどちらにおいても特性不安が高いほど再生成績が高くなる傾向が確認できたため、当初の予測に即した結果が部分的に得られたものと考えられる。これには、不安患者にみられる注意バイアスと類似の

現象が関連していたのではないかと考えられる。MacLeod et al. (1986) は不安患者と健常者を対象に、プローブ検出課題を実施し注意バイアスを検討した結果、不安患者は中性情報よりも脅威情報後に呈示されるドットに対して反応が速かったことを報告している。すなわち、感情価にかかわらず、シナリオ自体に注意バイアスが向けられたことにより、上記のような結果が得られたと考えられる。

項目ごとの正答数

項目ごとの正答数を分析した結果、1番目の質問である「一番最初に出てくる登場人物の名前を教えてください」という問いで、ネガティブ課題はポジティブ課題よりも正答数が有意に多かった。また、ポジティブ課題においても、1問目は他の質問よりも正答率が高い方であった。これには初頭効果の影響もあるものと考えられる。干渉課題を行ったものの1番目の質問自体の難易度は低く、また早ければ2分ほどで再生課題に到達できてしまっていたところからも、そうした影響がみられたのではないかと考えられる。

本研究の成果および今後の課題・展望

本研究では特性不安が高ければ高いほど、感情価にかかわらず再生成績が高くなる傾向にあることが示された。以上より、特性不安がネガティブ感情の再生成績を高めるという当初の予測は部分的には認められたが、上記のように、シナリオ自体に注意バイアスが向けられたという解釈をすることも可能であるため、使用するシナリオや再生課題（条件間で同一課題を呈示する等）についての再考が必要だと考える。

また、特にネガティブ課題において初頭効果が強まる傾向がみられたが、これは1番目の質問に対してだけであり、また特性不安の程度による違いも未検討であったため、この点についても今後検討が必要である。

また、本研究ではポジティブもしくはネガティブ感情を喚起させるための実験的操作として、各感情を喚起させることを意図した情報である二種

のシナリオを用意した。しかしながら、これらのシナリオに含まれる情報が当初予測した感情を適切に喚起していたかについては不明であるため、この点についての精査も求められる。

最後に、本研究では調査対象者が32名と少なく、またポジティブ、ネガティブの割り振りも均等ではなかった。参加者募集上の制約はあったものの、結果的にそれぞれ20名、12名という偏った割り振りとなった。そのため、仮に予測通りの結果が得られていたとしても、結果の信頼性には懸念が残るため、結果を十分な根拠を持って示すことが出来たとは言い切れない。こうした点を改善し、結果の信頼性を高め、対立する感情記憶間の再生成績の差を検討していくことが必要だと考える。

引用文献

- Banaji, M. R., & Hardin, C. (1994). Affect and memory in retrospective reports. In N. Schwarz & S. Sudman (Eds.), *Autobiographical Memory and the Validity of Retrospective Reports* (pp. 71-86). Springer.
- Crawford, M. T., Sherman, S. J., & Hamilton, D. L. (2002). Perceived entitativity, stereotype formation, and the interchangeability of group members. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83(5), 1076-1094.
- 藤原裕弥・岩永誠・生和秀敏 (2007). 不安と抑うつにおける認知バイアスに関する研究 (展望) 行動療法研究, 33(2), 145-155.
- 神谷俊次 (1997). エピソード場面刺激による感情喚起が記憶に及ぼす影響 心理学研究, 68(4), 290-297.
- 神谷俊次 (1998). 会話内容の記憶に及ぼす感情喚起の効果 心理学研究, 69(5), 376-383.
- 川原正広・松岡和生 (2008). 外向型・内向型における注意機能特性と情報処理スタイルの関連性 現代行動科学誌, 23, 1-10.
- 数井裕光・須賀楓介・掛田恭子・上村直人・榎林哲雄 (2018). 情動と記憶 神経心理学, 34(4), 258-265.
- Kensinger, E. A., & Schacter, D. L. (2006). When the Red Sox shocked the Yankees: Comparing negative and positive memories. *Psychonomic Bulletin & Review*, 13(5), 757-763.
- 小林正法・松川順子 (2011). ポジティブ画像記憶の意図的抑制 認知心理学研究, 8(2), 109-117.
- MacLeod, C., Mathews, A., & Tata, P. (1986). Attentional bias in emotional disorders. *Journal of Abnormal Psychology*, 95(1), 15-20.
- 野畑友恵・越智啓太 (2005). 記憶に及ぼす覚醒度の効果は快・不快感情によって異なる——覚醒度説への反証—— 認知心理学研究, 3(1), 23-32.
- 清水秀美・今栄国晴 (1981). STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY の日本語版 (大学生用) の作成 教育心理学研究, 29(4), 348-353.
- 辻平治朗 (1998). 自己意識と他者意識の特性 5因子モデルへの位置づけ 辻平治朗 (編著) 5因子性格検査の理論と実際 (pp. 229-238) 北大路書房
- 堤聖月・清水寛之 (2020). 自伝的記憶における想起された出来事の特徴と忘却への懸念との関係 心理学研究, 91(5), 332-338.
- 和田さゆり (1996). 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究, 67(1), 61-67.
- Walker, W. R., Skowronski, J. J., & Thompson, C. P. (2003). Life is pleasant—and memory helps to keep it that way! *Review of General Psychology*, 7(2), 203-210.
- Watson, D., Clark, L. A., & Tellegen, A. (1988). Development and validation of brief measures of positive and negative affect: The PANAS scales. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54(6), 1063-1070.
- 山崎勝之 (2006). ポジティブ感情の役割——その現象と機序—— パーソナリティ研究, 14(3), 305-321.

付記

本稿は、第二著者が第一著者の指導のもとで人間心理学科 2023 年度卒業論文として提出した論文のもとに、第一著者が再分析、加筆修正および再考察を行ったものである。

The effects of positive and negative emotional valence and intrapersonal factors on recall performance

Tomofumi Owada & Kentaro Nagata

Abstract

Previous research on emotional memory has consistently shown that memory performance for stimuli associated with positive and negative emotions (i.e., emotional memory) is superior to memory performance for non-emotional memories. However, research focusing on differences in memory performance between emotional memories, such as memories associated with positive and negative emotions, has not obtained consistent results. Therefore, in this study, we aimed to investigate whether differences in recall performance occurred between such opposing emotional memories. The investigation was conducted using Google Form among 32 undergraduates (23 women, and 2 non-respondents) from Department of Psychology and Humanities at Edogawa University. In this study, we used originally created fictional episodes as stimulus sentences (scenarios) to examine differences in recall performance based on emotional valence (positive vs. negative). In addition, we examined the influence of intrapersonal factors (introversion and trait anxiety) on recall performance. The results showed that the higher trait anxiety, the higher recall performance tended to be. Furthermore, recall performance for a certain item tended to be significantly higher in negative condition. This may have been related to a phenomenon similar to the attentional bias seen in anxious patients. In other words, this result can be interpreted as an attentional bias directed toward the scenario itself, regardless of emotional valence. Therefore, it is necessary to reconsider the scenarios and recall tasks used, and further examine the differences in recall performance between opposing emotional memories.

Keywords: memory, emotional valence, recall performance, introversion, trait anxiety.